

## 6.1 カリキュラムの編成

### 進捗状況報告

【6. 1. 1教育課程】 【6. 1. 2履修科目の区分】 【6. 3. 3授業形態と単位の関係】 2003年度のカリキュラム理念を引き継ぎながら、2008年度入試から文化歴史学科が1年次で専修配属決定となったことも受けて、学部全体の共通科目中に置かれている「総合科目・入門科目」の必要単位数を8単位から6単位に減らし、学科科目の必要単位数を2単位増やすという改正を行った。この改正にあたって総合科目の開講数は2007年度の11科目から9科目となったが、その内容の充実と、学生に幅広い学習の選択機会をこれまでどおり与えていくことを目指して、総合科目等検討ワーキンググループでは入門科目も併せてこの科目の提供母体や授業形態についての見直しを図られ、カリキュラム委員会及び教務事務サイドでは時間割の調整が図られた。その結果、2008年4月からの総合科目の中には、企画の運営は専修に依頼するが授業内容は専門領域に偏ることのないものを提供する「学科提供専修責任」型による授業科目が登場することとなり、受講者数に関しても2科目にやや問題があることを除いてはほぼ適正規模の状態が保たれ、またそれぞれの入門科目にあっても、科目名称に直接関わる自専修だけでなく、複数の他専修からの学生履修者数が2007年度より増えてきた傾向が見られる。一方広領域の履修コースについても、広領域運営委員会で「言語科学コース」のプログラムの検討が行われ、2008年度からは「言語科学」の中核をなす「言語哲学」・「言語心理学」・「対照言語学」に関しては関連専修・学科のカリキュラム内に再配置することによって、領域横断的なカリキュラムの存在を引き続きアピールしていくこととなった。

【6. 1. 5開設授業科目における専・兼比率等】 文学部のカリキュラムを系統的に見てその中軸をなすキリスト教科目・人文演習・入門科目・演習科目・卒業論文についての専任教員の担当率は100%であって、従来の方針は維持されている。一方、科目の性質上、非常勤講師との連携が必要な学科科目中の専門講義科目・特殊講義科目における専任教員の担当率は2008年春学期の場合で、それぞれ56. 2%、52. 2%であった。双方の平均をとれば2007年度のそれと比べて大きな変化はなく、この科目群における専・兼比率の適切性も保持されている。

### 学内第三者評価

カリキュラムに関して、複数の専門分野からなる学部の困難を乗り越える努力が継続されていると認められる。学部全体の教育を充実させる意味で、総合科目開講数の減少を補うために設けられた「学科提供専修責任」型科目や領域横断的なカリキュラムの充実に期待したい。また入門科目を他専修の学生が広く履修するよう引き続き適切な履修指導が行われることが望まれる。

なお、学外委員からは以下の意見があった。  
総合科目提供のありかたや専・兼比率については、適切な努力がなされている。